

氏 名	い によまん ういであ ばらまでやくさ I Nyoman Widya Paramadhyaksa
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 5 2 6 号
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 3 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学 位 論 文 題 目	CONCEPTS OF BALINESE <i>MERU</i> (バリのメル建築の概念)
審 査 委 員	(主査)教授 日向 進 教授 森田孝夫 教授 小坂郁夫

論文内容の要旨

本論文は、インドネシアのバリ島に固有の塔状建築、ヒンズー教の建築MERU（メル）を対象として、建築的な歴史や意味を解明し、形態や装飾彫刻があらわす建築的な概念を明らかにすることを目的としている。メルは神への祈りの建築であると同時に先祖の魂を祀る建築でもある。平面は方形で、基壇（石あるいは煉瓦造）の上にRONG（ロン）と呼ばれる単純な形の神聖な室（木あるいは煉瓦造）が建ち、上にいくにつれて遞減し段状に重なる屋根（椰子の繊維あるいは茅葺き）で構成される。古代寺院にのこる文献や古代寺院の遺跡からは、ジャワ島とバリ島のメルが、かつてヒンズー教徒・仏教徒両者のための施設として使用されていたことが知られるが、インド圏外の東南アジアにおけるヒンズー教世界の建築的概念については十分な解明は進んでいない。

本論文では、バリ島のメルに着目して、

- ・バリにおけるヒンズー教と仏教伝来の歴史
- ・ヒンズー教と仏教の原理
- ・ヒンズー教と仏教の宗教観
- ・ヒンズー教の神話、ヒンズー教と他の宗教建築の形態・意味との比較
- ・バリに行われている生と死に関する信仰

について整理をした上で、次のように論を組み立てている。

< 1 章 > メルに関する文献および既往の研究について述べている。

< 2 章 > メルの概要を述べ、屋根の数、構成要素の種類、装飾の種類、聖室の大きさ、構造システム、配置に関する調査結果を述べている。

< 3 章 > ジャワ島およびその他諸国にあるヒンズー教寺院と仏教寺院、ヒンズー教の宇宙観、ヒンズー教の神話、バリ島の民間信仰に関する文献調査の結果を述べている。

< 4 章 > メルの各部形態に付された建築的な意味、および装飾的な彫刻の意味について考察している。

< 5 章 > 以上の所見から、以下の結論を述べている。

- ・メルは人間が最後にたどりつくメル山（宇宙の聖山＝須弥山）をあらわしている。
- ・メルの頂部（ムルダー）は天国という聖地を示している。

- ・各部に施された彫刻は、世界と人間を形作る五つの要素（地水火風空）との関係性が認められる。
- ・メル姿はヒンズー教のリンガ・ヨニ概念（神々の世界と人間界を結ぶ）を体現している。
- ・天国を連想させるメル頂部の飾り（ムルダー）と各層の鳥、惑星をあらわす聖室入口の彫刻、メル山を支える八頭の象を示す基壇部分の象頭彫刻は、宇宙の三段階（天上界、遷移世界、人間界）と関連する。
- ・メルの頂部飾りが示す靈魂の故郷である天国と基壇の大亀が示す地獄は、転生と因果応報という概念をあらわしている。
- ・聖なる降雨を示す聖室入口にある悪魔の彫刻、階段と基壇に施された双龍によって示される河川、地獄を示し意味に棲む巨大動物を示す彫刻は、宇宙の連続的なライフサイクルを導く三種類の水（虹、雨、地表水）を表現している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、メルというバリーに特有の層塔建築の地域的な固有性、またアジアという広い世界の中に分布する他の層塔建築との関連性などについて、ロンタルと呼ばれる古文書（神話、歴史、彫刻などについて記す）や教典（主にヒンズー教のヴェーダ）類似する遺構などの文献資料から解明を試みたものである。

建立年代、大きさ、外観など多岐にわたるメルの、建築各部を構成する形態のもつ象徴的な意味、基壇や聖室入口廻りの？、軒蛇腹などの各部を飾る彫刻が物語るヒンズー教的宗教観、宇宙観が読み解かれていく。

申請者が立論の主な拠り所とした古文書ロンタル（ロンタルアスタコサリ）は、椰子の葉に特別なナイフで書かれているということ、なにより聖なる文書として閲覧には厳格な手続きがもとめられることから、研究素材としての価値は認められている一方で、取り扱いには困難な条件をそなえている。インド圏外の東南アジアにおけるヒンズー教寺院の建築的特質として、インドにおけるよりも建築形態を宇宙論などと結び合わせて神話上の観念を表現する試みがみられることが指摘されている。申請者は断片的に採録されているロンタルの記述を丹念に収集分析し、従来論じられることがほとんどなかった、メルの建築形態と彫刻によって可視化されるバリーにおけるヒンズー教の宗教観、宇宙観を解き明かした。

古文書のさらなる収集、分析や、生死に関する宗教儀礼、習俗の実際に関する克明な観察などにより、申請者の推論、解釈はさらに深化するものと思われる。中心を貫く柱をもつタイプ（ティアンベティ）と持たないタイプ（ティティマーマー）の形成過程に関する建築史的な判断は慎重に保留されているが、その精密な解明は今後の課題である。

本論文は、審査を経た次の2編の論文（申請者による単著：1 - 英語、2 - インドネシア語）をもとに、英語で書き改められた。

1. Architectural Concept of the Balinese Meru : 東アジア建築文化国際会議 京都 2006 論文 集 pp.229-238、2006 年 12 月
2. Konsepsi Yang Melandsi Bagian Dasar Bangunan Meru Di Bali (バリ島におけるメルの

基壇 の概念について):Media Teknik Vol.30 No.3 (Gadjah Mada Univ.), pp.229-238、
2008 年 8 月